信州大学附属図書館での社会体験研修

島　田　貴　広　（松本蟻ケ崎高校）

１．本研修について

長野県では公立高校の採用から9年以上になる教員を対象にキャリアアップ研修を行っている。その一環として、各自で地域企業等へ依頼して社会体験研修を行い、視野の拡大や地域連携について考える機会を設けている。

今回、信州大学附属図書館様へ研修を依頼させていただいた理由は2点あり、1点目は高大接続の観点である。本校から毎年進学する生徒もおり、大学側が求めている高校生の姿を聞き、今後の進学指導につなげたいと考えていた。2点目としては、ICT化が進む過渡期での図書館や学生の変化についてである。コロナ禍を期にICT化が進み、高校の授業ではタブレット活用など様々な面でICT化が進んできたが、大学や図書館、それを利用する学生においては何か変化があったのか興味があった。私自身も信州大学で学生時代を過ごし、図書館も頻繁に利用していた。その頃の記憶と今を比較し、時代による変化を考え今後の教育活動に活用していきたいと思っていた。

２．研修概要

研修は表１の日程で松本キャンパスで実施していただいた。前日まで前期試験が行われており、休業期のため学生は少なかったが、久々に信州大学に入り、懐かしさを感じた。

表１．　令和４年度社会体験研修日程

日程	2022年8月8日（月）	2022年8月9日（火）
午前	・研修に関するガイダンス ・大学図書館の役割 信州大学附属図書館概要 ・館内案内　中央図書館/医学部図書館	・学習支援について ピアサポ@Lib
	・教育研究成果の発信、オープン化 ・地域連携について 県立図書館/市立図書館/知の連携フォーラム ・利用者向けガイダンスについて	・ピアサポ@Lib ライティングアドバイザー研修
午後	・新入生ガイダンスふりかえり	・「どこコレ？」展示準備/掲示物作成 展示図書選定/市立図書館蔵書確認
	・図書館資料について 図書/電子書籍/雑誌/電子ジャーナル/DB/各種コレクション	・研修ふりかえり ・意見交換

2日間という短い研修日程であったが多くの気づきや学びがあり、今回はそれらの感想を述べたいと思う。

３．研修を通じて

３−１．研修1日目

ガイダンスを受けた後に中央図書館の案内をしていただいたが、自分が学生の頃は改装前の図書館だったので、改装された図書館がとても新鮮に感じた。外観には工学部生の協力があり、館内には農学部生が作ったベンチが置かれ、館内のグループ学習用資料は教育学部生のアイディアで作ったものなど職員だけでなく学生も関わり図書館が作られていることを知り大変驚いた。図書館だけでなく、大学全体として教員・職員・学生が協力して大学を作り上げていく方針ということで、学生が学んだことを発揮する場があることは、学生にとってもうれしいことだと思う。

中央図書館の1階は可動式の机や椅子を配置し、グループでの勉強やミニ講演会ができるような共同学習スペースがあり、自分の思っていた図書館のイメージとはかなり違いを感じた。コロナ前は多くの学生でにぎわっていたそうだが、感染対策のため机の間隔や椅子の数も少なくしてあり、学生同士の活発な話し合いができず、学生にとっても残念だと感じた。早くコロナが落ち着き学生が活発に取り組んでいる姿を見てみたいと思った。2階も同様だが、グループ学習室やセミナー室があり、コロナ前は可動式のホワイトボードもあったということで1階より勉強のためのスペースという感じがした。3階はまさに図書館という形で大学生時代の記憶が蘇る場所が何か所かあった。学生の学習スタイルも多様化していく中で、図書館内を学習スタイルに応じて使い分けられるように工夫されており、学生の変化に合わせて学習の場も変化させることが大切だと感じた。

医学部図書館は専門書がずらりと並んでおり、中央図書館との違いを感じた。医学系では最新の内容が大切ということで、なるべく新しいものを入れているが、紙媒体では保存場所の問題もあるので、電子書籍の普及も医学部の方が進んでいるということだった。逆に昔の文献が必要な学部は紙のものが重要になるということで、学部の特性によって図書館の在り方も違うのだと感じた。医学書は1冊が厚く重たいものもあり毎回棚に戻していると大変なので、一時保管できるようなファイルボックスが用意されており、学生が使いやすくなる工夫がなされていた。

各学部の図書館では専門書だけではなく広辞苑等の分野を問わず使う書籍は各図書館で必要になるため、信州大学全体としては同じ本が複数必要になってしまうということだった。その解決策の1つとして電子書籍の導入を以前から行っており、特にコロナ禍で電子書籍の利用が大幅に増加したということであった。高校ではデジタル教科書の普及がほとんど進んでいないが、大学では教科書のデジタル版も導入されており、高校より電子書籍の普及が進んでいると感じた。電子書籍の導入により同一図書をキャンパスごとに購入しなくて済むようになるが、紙に比べて1.5倍から3倍の費用がかかるデメリットもあるということであった。個人で購入するときと同じ値段だと思っていたのでとても驚きだったが、よく考えてみれば、図書館の場合は1人ではなく多くの人が読めるのでコストの違いになるのかと思った。

中央図書館、医学部図書館を見た後に大学図書館の業務の1つとして、研究結果の発信について貴重なお話を伺うことができた。機関リポジトリやオープンアクセスなど初めて聞く言葉が多かったが、とても興味の湧く内容であった。研究結果の共有が新たな研究に向けて大切であるが、そのために研究内容のデータを保存しておく大容量ストレージ等の管理基盤の整備や研究データ公開のための運用業務が必要であり、図書館や大学独自では限界があるので、他の部署や機関との連携が現在の検討事項ということであった。

午後には新入生ガイダンスの振り返りにも参加させていただいた。どうすれば利用者が増えるかという難しい問題や最近はSNSをよく使うのでSNSにも対応したガイダンスの在り方、ネットの使い方はある程度知っているから説明だけではなく作業する時間を増やすなど、時代や学生の特徴に合わせたガイダンス作りのために活発な意見交換がされた。自分も入学後に図書館ガイダンスを受けた記憶があるが、その裏には多くの図書館職員の方の努力があるのだと改めて感じた。

1日目の最後には信州大学が管理している資料についてお話を伺うことができた。信州大学附属図書館では所蔵する和古書等をデジタル化して公開している。特に、コロナ禍では移動が制限されていたので、デジタル資料の役割が大きかったということだった。デジタル資料は場所の制約がなく利便性が高いが、現物資料をスキャンする際に文字の認識が難しいことがあるなど、デジタル化するためには様々な労力があるということが分かった。

３－２．　研修2日目

信州大学附属図書館ではピアサポ＠Libという学習支援を行っており、教科の学習相談とレポート執筆支援の2つを行っている。特に、レポートについては高校で書く機会があまりないため、大学でのレポート課題に学生がつまずかないようにレポートの基礎から支援しているということであった。支援にあたるのは2年生以上の学生であり、定期的に研修も行っているということで、今回はレポート執筆支援の研修会に参加させていただいた。お互いの工夫や悩みなどを共有し、より良いものを作っていく姿を見て、上級生側にとっても貴重な成長の機会になっていると感じた。また、学生と職員だけでなく教員とも連携を取り、教員も授業内で学習支援の紹介をするなど、学生・教員・職員が一体となって学習支援に取り組む連携の強さを感じた。

教科の学習支援では理系の科目が多く、特に数学が群を抜いて一番であった。これは信州大学のみの話ではなく、他の大学でも数学に苦労している生徒が多いということであった。受験で数学Ⅲを使わない生徒が入学後に数学Ⅲを前提とした授業に苦労しているのではないかと感じた。本校でも理系だが受験科目に数学Ⅲを必要としない大学を受ける生徒も多く、数学へのモチベーションを心配している。受験に受かることも大切であるが、大学での勉強を考えて学習に取り組むことも大切だと感じさせられた。特に自分は数学の教員として、この内容を真摯に受け止め、今後の授業で理系は大学での学びのためには数学が重要であるということをしっかり伝えていきたいと思う。

コロナ禍以前は学習相談の件数は増加傾向にあったが、感染防止対策として閲覧席数を減少したことにより来館機会が減少し、支援を受ける様子を目にする機会も減ったことから相談件数が

減少、また、本当に学習支援の必要な生徒がなかなか来てくれないという現状もあり、今後も学生への普及が課題となっている。

午後には松本市図書館で8月末から開催する「どこコレ？」展示の準備に参加させていただいた。この企画は信州大学が所蔵している写真の中から、撮影された時代や場所が分からない写真を一般の方に見ていただき、昔の記憶から思い当たる情報を付箋に書いて貼っていただく企画である。地域の力を借りて古い写真の情報を集め、今後の歴史資料としての活用につなげるだけでなく、昔を思い出すことで世代を超えた交流につながるとても面白い企画だと感じた。実際に自分も展示準備をしながら、どこから撮った写真か色々考えて職員の方と推測するなど楽しみながら準備の協力をさせていただいた。信州大学としても地域社会との繋がりも重視しており、このような企画を通して地域に根差した大学として新たな価値を高めていっているのだと感じた。

2日目の最後には図書館職員との交流の機会を設けていただき、貴重な情報交換をすることができた。その中でもパソコンの使い方やタイピングに関して得意な学生と苦手な学生の差が大きいという話がとても印象に残った。確かに高校でパソコンを使うのは情報の授業ぐらいなので、高校と大学でのギャップがあると感じた。特に、本校2年生はタブレットを導入した最初の学年であり授業でもタブレットを使っているため、現2年生が大学生になった際にICT機器のギャップについていけるのか不安を感じた。

４．終わりに

電子資料の普及により図書館に来なくても本が読めるようになるということは図書館の存在意義に関わる重大な変化であったと思う。このような情報化の過渡期のなか、信州大学附属図書館で取り組んでいる学習の場の提供や学習支援、さらには地域交流の場というものが新たな図書館の在り方として考えられると感じた。また、図書館職員の方との意見交流を通して外部から見た高校について知る機会となり、とても新鮮な経験となった。特に、高校と大学でのギャップについては今後の授業改善や学校運営に反映していきたいと思った。

最後に、本研修のためにコロナの第7波の感染が広がるなか、そしてお盆休業前のご多忙のところ貴重な研修を実施していただいた信州大学附属図書館の皆様に、この場をお借りして心から感謝申し上げ本研修のまとめとしたい。